自然景観の変化から説話の背景を探る

――中世聖徳太子伝『聖法輪蔵』別伝の四天王寺建立説話に見る樹木伐採と木材調達――

松本　真輔

一　はじめに

本稿は、中世聖徳太子伝の四天王寺建立説話を、樹木伐採と木材調達による自然景観の変化という視点から読み解こうという試みである。四天王寺建立説話については、『日本書紀』崇峻天皇二年条で物部守屋との合戦にからめた形で一種の縁起が語られており、平安時代になってその内容を取り込みつつ根本縁起である『四天王寺縁起』が編纂され、「本願縁起」として『聖徳太子伝暦』にも引かれている。[1] 中世に編纂された各種の聖徳太子伝ではその内容が増補され新たな説話が展開していたが、本稿では、代表的伝本の一つである『聖法輪蔵』をとりあげ考察を進めていく。『聖法輪蔵』は一三一七年を起点に数十年にわたり増補がなされてきた編年体の物語的聖徳太子伝で、[2] その別伝にある四天王寺建立説話は、六角堂縁起との関連で同書に取り込まれたものである。その展開の様相や相互関係については既に詳しい研究があるが、[3] 本稿では、四天王寺建立の際に聖徳太子が樹木を伐採して木材を調達したという、古代の四天王寺縁起にはなかった新たな要素に焦点をあて、その背景を探ってみたい。[4]

結論的に言うならば、そこには、中世における森林資源の減少という問題が見え隠れする。古代に始まる寺院建立や王都建設などによる度重なる自然からの収奪は森林破壊を招き、やがて木材調達が困難になるという現実が生まれていた。そのため、木材調達が聖徳太子による新たな奇跡として浮上したと考えられるのである。

二　樹木と日本の景観

本稿の発端となったのは、法隆寺宮大工の棟梁、西岡常一が遺した次の言葉である。

その樹齢の長いヒノキが日本には残ってませんのや。わたしらが法隆寺や薬師寺の堂や塔を建てるためには、台湾までヒノキを買いにいかなあならんのです。〈中略〉今、日本で一番大きいのが木曽の四百五十年。これでは堂も塔もできませ

ん。[5]

考えてみれば当たり前のことではあるのだが、この言葉は、寺院建築が巨木の調達によって支えられていたという現実を改めて教えてくれる。仏教の伝来は日本社会を大きく変えたが、自然の景観も例外ではない。大和地方に生い茂っていたヒノキの巨木は法隆寺をはじめとする木造建築に結実したが、その代償も大きかった。巨大寺院建設や度重なる遷都は「淀川上流の莫大な木材の伐採」を伴っていたが、これが「山林の荒廃を招いて土砂を絶え間なく流出させ」、かつては大阪湾であり次いで河内湖となっていた場所の陸地化を促し、「今日の大阪の土地がつくられる[6]」契機ともなっていた。人の営為が自然の景観を大きく変えてしまったのである。

一方で、現在の日本の山々は、厚い樹木に覆われている。地域や季節による違いがあるのはもちろんだが、その多くは常緑樹で覆われ、土色をしたはげ山を見ることはあまりない。そして我々は、今見る緑の森が過去から存続していたと考えがちであり、それは人間の感覚として不自然なことではない。

しかし、緑豊かな現代の景観も、わずか百年ほど遡るとその様相は一変する。明治大正時代に撮影された古写真の数々は、「過去の時代においては山のどこもが森林でおおわれていた[7]」と思いがちな我々に、その景観が「大きく様変わり[8]」していることを教えてくれる。植物相の後退を示す松林となっているか、あるいはそもそも木が生えていないのだ。

むろん、このような景観の変化については、先行研究でもしばしば言及されてきた。自然景観を日本一律に論ずることが難しいのは当然の前提としても、現代とは異なり近世の日本各地では「人為的に荒廃させられた林地」である「はげ山[9]」が少なからず広がっていたとされる。一方、「今日、その多くが緑で色濃く覆われている日本の林野も、そのような姿を見せるようになったのは、戦後の高度経済成長期以降のことにすぎ」ず、「今日の森林資源量は、近世以来の歴史の中で最高記録を更新中[10]」という状況にある。現代の樹木の増加は、「たった数十年の間に起きた、急激でしかも劇的なもの[11]」であり、今から半世紀ほど前には「尾根部分は草原だった」ため「大阪平野が一望できた」生駒山も、「今は山頂付近まで木に覆われ[12]」、必ずしも見通しのいい場所ばかりではないという。近代以降の大規模な開発により「いま日本の森林は〈中略〉無気味なはげ山の連山と化している[13]」と環境破壊に警鐘を鳴らしていた時代とは状況が大きく異なっており、端的に言えば「森林の過少という極端な状態から、森林の過剰というもう一方の状態まで、森林の成長力を背景に意外に短期間で進行した[14]」のである。そして、豊かな自然を背景に野生動物が増殖して人間との棲み分けが難しくなり、「獣害列島」と呼ばれる事態が静かに進行している[15]。

こうした「現代日本人は、列島の歴史上かつてないほど豊かな緑を背景にして生きている[16]」という状況は、我々が過去の自然景観を想像するとき、樹木が覆いつくす山野を当然の前提として想定できない、ということを意味する。芳賀矢一が「山川は秀麗である。花紅葉四季折々の風景は誠にうつくしい[17]」とし、志賀重昂

『日本風景論』や和辻哲郎『風土』が前提としていた日本の自然景観も、現代とは異なる姿だったことが予想される。[18] 自然と人が織りなす景観や風景が「文化的アイデンティティに関するきわめて確かな指標」[19]であるとするなら、これは決して看過できる問題ではない。

では、なぜかつての山に木が生えていなかったのか。理由は簡単である。人間が伐採したのだ。前近代とは要するに化石燃料が十分に活用できなかった時代である。そのため木材は「燃料すなわちエネルギー資源」として「大量に使われ」[20]ていた。また、建物も木造が基本である。建築には大量の木材を要するが、当然それは森林から伐採されたものである。むろん、樹木は山にだけ生えているわけではない。一五〇〇年前ごろから「本州以内（マヽ）の低地帯で樹木花粉が急減する。これは、農耕活動の活発化のために、平地の森林を切り開いた結果である」[21]ことも知られている。農地を開拓するために森林が伐採され、焼畑も行われていた（ちなみに、焼畑は和歌の題材にもなっている）[22]。

日本におけるこのような森林伐採の歴史は、縄文時代にまでさかのぼる。三内丸山遺跡では、もともと森林であった場所が大規模に開発され、従来とは異なる植物相が出現していた。[23] さらに同遺跡では直径２ｍを超える六本の柱穴が発見されており、[24] 巨木伐採の始まりも見て取れる。弥生時代に入ると、農耕の発達と加工技術の進展で木材利用は更に広がり、[25] 須恵器生産の燃料に樹木が利用され山林が荒廃していくなどの事例が現れるようになる。[26]

さらに、神社や寺院の造営が樹木の減少に拍車をかけた。この問題は既に戦前から指摘されており、「飛鳥時代の頃に及び、大和方面は長年月に亘つて絶えず伐採され建築用材の欠乏」[27]が見られるようになる。また、平安京に至るまでの度々の遷都や人口の集中など、人為的な要因で「林産物の消費」が「急激に増加」したため「大和・山城を囲む紀伊・伊賀・近江・丹波・播磨・摂津などの山々」では「林相は次第に悪くなりつゝあった」[28]という。東大寺大仏殿が大規模な森林資源収奪の末に完成し、[29] その後の再建のための木材調達にも大きな苦労がともなっていた。

こうした森林開発の痕跡は、和歌からもうかがうこともできる。例えば、『万葉集』にうたわれる松（植物相の退行を示す）の背景に「古代の宮都建設による山地の開発」[30]があったとの指摘があるが、そうした松が生い茂る景観は、卑弥呼が目にすることはなかったのかもしれない。[31] また、『古今和歌集』の「明日香河淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ」「世の中はなにか常なるあすか河昨日の淵ぞ今日は瀬になる」[32]などは、森林伐採による土砂の流出を示す事例としてしばしば引用される。[33]『散木奇歌集』などの歌から平安時代末期の森林開発の様相をうかがう試みもある。[34]

むろん、日本全体を見渡せば「とぶさ立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ」[35]（『万葉集』）など、開発の及ばない地域も決して少なくはなかったであろう。ただ、例えば「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香久山」[36]（『新古今和歌集』）では香具山に衣を干したとしているが、現在の同地を見ると人間の背丈をはるかに超える樹木が山を覆ってしまってい

る。この歌が「眼前の実景ではなく、伝承[38]」をふまえたものだとしても、想定されている山の景観は果たして現在と同じだったのだろうか。いわゆる古代の天皇が行ったとされる国見も同様である。葛城山に行幸した雄略天皇一行が「向へる山の尾より、山の上に登る人[39]」を見たという『古事記』の記事から、「葛城山へとのぼる二つの尾根は、裸地にちかいか、あるいは草丈がひざあたりより低く短い」状態であることが判明し、なぜそうなっていたかと言うと「そこで水田稲作にたずさわる人びとのため樹木が伐採されつくしている状態[40]」だったからだと推測されている。『万葉集』には、舒明天皇が「香具山に登りて望国したまふ時[41]」の歌があるが、「聖なる山の頂から、大和全体を広がりをもって望み見[42]」たというのであるなら、少なくとも視線を遮るような樹木は生い茂っていなかったということであろう。仁徳天皇が「高き山に登りて、四方の国を見[43]」（『古事記』）たという記事も同様である。

また、『日本書紀』舒明天皇即位前紀には、推古天皇死後の皇位継承をめぐる争いの顛末が記されているが、山背大兄王に味方した境部摩理勢の子毛津が畝傍山に逃げ込んだ様子が「畝傍山木立薄けど[44]」云々の句で表現されている。木立がまばらであったがゆえに隠れることができず、簡単に発見されてしまったのだ。これは、樹木が覆う現在の畝傍山を想像すると理解が難しくなるだろう。

三　『聖法輪蔵』別伝の四天王寺建立説話

では、前述の議論を念頭におきつつ、改めて中世聖徳太子伝の四天王寺建立説話に現れた樹木伐採と木材調達について見ていこう。問題となるのは、『聖法輪蔵』に組み込まれた別伝「四天王寺建立事」と、「六角堂最初建立事」である。

なお、これらの先蹤として『醍醐寺本諸寺縁起集』所収「六角堂縁起」があることが知られており[45]、そこでは、聖徳太子が「四天王寺を建立せんと欲して、材木を山城国愛宕の杣に採[46]」ろうとしたとされている。ただこれはあくまで六角堂の縁起で、四天王寺については簡潔に記すのみだ。四天王寺建立に関する詳しい記述は『聖法輪蔵』別伝などの各種中世聖徳太子伝にあり、以下、『聖法輪蔵』満性寺本によってその概要を見ていくことにする。

まず、同書「四天王寺建立事」の前半部では、「彼ノ四天王寺ノ材木ヲハ、山城国ヨリ淀川（ヨト）ヲ下シテ、摂津国難波ノ浦ニ付テ、太子十六歳ノ十月ニ悉ク建立シ給ヘリ[47]」と木材調達について簡単に触れられ、続いて別立ての「六角堂最初建立事」に、そのいきさつが詳しく記述されている。そこでは六角堂縁起と融合する形で話が展開するのだが、ここで問題としたいのは、四天王寺建立に関連する部分である。まず、仏教受け入れをめぐる物部守屋との合戦に勝利した聖徳太子が、本格的に四天王寺建立を開始する場面を見てみよう。

彼ノ四天王寺ノ材木ヲハ、山城国愛岩（ママ）ノ郡（リ）、昔深（シ）山ニテ大木枝ヲ並ヘテ侍ケルニ①、太子多ノ人夫ヲ召具シテ入セ給テ、彼山ニ廿余箇所ニ木屋仮屋（コヤカリヤ）ヲ造リ、上下乱入シテ、我ハ劣ラスシテ材木ヲ取リ侍リケリ[48]②。

興味深いのは傍線②で、寺院建立に際して樹木の乱伐が始まっ

たという。次節でも触れるが、これは中世の寺院領でしばしば問題になっていた行為である。また、傍線①に「深山」とあるのは「奥山」とも言われる未開発の地域を指す語であるが[49]、それが「昔」のことだったということは、現在は「大木」が失われていることを示唆している[50]。なお、類話をのせる慶應義塾図書館蔵『聖徳太子伝正法輪』では、ここに「太子彼ノ比叡山ノ大嶽ニ御行シテ多ノ材木ヲ取」らせ、それを「天ニ上リ虚空ヲ飛[51]」ばせて四天王寺建立の場所まで運んだという話が挟まれている[52]。さて、満性寺本では先に続いて「彼愛岩ノ郡ノ杣山ニ入リ御シテ、諸ノ材木ヲ取シメ給ケル時、条々ノ不思義ノ事」があったとして、

今ノ平ノ京、六角堂ノ寺中ニ相当テ、大木ノ楠ノ木ノ末モ無キカ五本侍リケルカ、夜ナ々光明ヲ放チ侍リケルヲ、今ノ四天王寺ノ五重ノ宝塔ノ心ノ柱、又内陣ノ四柱ノ料ニ、人夫共ニ仰付テキラセサセ給フニ、打立ルヲノマサカリ、ヲトリノキ〳〵立返テ更ニキラレス、諸ノ杣人目闇レ、鼻血タリ、身毛弥立チ、心身迷惑シ侍リケレハ③

と、傍線③のような伐採のたたりとも言える現象がおきる。そして、これを聞いた聖徳太子は「彼ノ霊木ニ向テ、暫ク御観念有テ、既ニ彼ノ木ヲ切リ給」い、それに勇気づけられた人々が「上下勇ヲ成シテ、土木ノ営ミヲ仕リ侍リキ、仍チ天王寺建立ノ材木、速ニ其ノ功ヲ終ヘ侍リケリ」と、無事に木材の調達を果たしたとされる。

更にこの後、「白髪タル化人ノ翁」が現れ「不審」を抱いて尋ねると、聖徳太子は「此ノ山ノ材木ヲ取テハ、四天王寺ト云大加藍ヲ有縁ノ霊地ニ建立」するのだと答える場面が続くのだが、これが図案化され、一三二四年の奥書を持つ堂本本絵伝をはじめ多くの聖徳太子絵伝に収録されている[53]。また、『聖法輪蔵』と成立時期の近い『聖徳太子内因曼荼羅[54]』の類話では「太子自ラ斧ヲ取テ切倒シテ、天王寺ノ塔ノ心ノ柱ラ等ノ数スノ梁材ヲ取[55]」ったともされている。以上が、『聖法輪蔵』別伝の四天王寺建立説話における樹木伐採と木材調達に関する記事の概要である。

四　樹木伐採と木材調達説話の背景

次に、前節で見た樹木伐採と木材調達説話の背景について考えてみたい。前者については中国にも様々な説話があることが知られており[56]、樹木伐採と神罰という構図は六国史などにも見られる[57]。寺院縁起についても、例えば『今昔物語集』巻一一・二二には、仏堂を造るため槻の木を切ろうとしたところ、人々が死んでしまったので、中臣祭文を読んで怒りを静め伐採が行われたという説話もある[58]。

また、木材調達について、その運搬が難事業とされていたのは、「塔幢の材木近く東山に得たり。僧等今月十九日より夫と与に曳き運ぶ。木は大きに力は劣にして功を成さむこと大だ難し[59]」（『続遍照発揮性霊集補闕抄』）とされる通りで、『今昔物語集』巻一一・二四にある久米仙人の話では、「大中小ノ若干ノ材木」が「南ノ山辺ナル杣ヨリ空ヲ飛テ、都ヲ被造ル所[60]」に至る奇跡があったとされ、それ以外にも、薬師寺南大門天井の木材を吉野の杣から運んだ話（同巻一二・二〇）や、関寺建立のために木を運んだ牛の話

（同巻一二・二四）、鞍馬寺建立のため大工や木こりを雇って木材を運搬させた話（同巻一一・三五）などがある。

樹木伐採や木材調達については、素戔嗚尊がスギ・ヒノキなどの用途を示したという『日本書紀』神代上の記事がかねてより注目されており、[61] また「天の下造らしし大神の命、天の御飯田の御倉を、造り給はむ林を、覓ぎ巡り行し給ひき」[62]（『出雲国風土記』）などもあるが、前述の『今昔物語集』を含め、寺社縁起でそれが語られる例はあまり多くない。『四天王寺縁起』でも木材調達という要素はなく、中世になって新たに現れたものである。

では、『聖法輪蔵』別伝など各種中世聖徳太子伝にこの説話が付加された背景は何だったのだろう。それは端的に、中世において建築資材たりうる木材の入手が困難となっていたという問題があったと考えられる。寺院建設や遷都で森林が失われた「古代の略奪期」[63]を経て、建築資材たりうる木材の調達が、解決すべき課題として浮上していたのである。

その実例としてしばしば取り上げられるのが、東大寺再建に関連する諸記録である。一一八〇年に焼失した東大寺復興のため、重源は伊賀や吉野などに良材を探すが思うようにゆかず、遠く離れた周防国にまでヒノキを求めている。[64] 後代の編纂ではあるが、東大寺大仏再建のいきさつを記す『東大寺造立供養記』は、その様子を「大材有りといえども好木得がたし。数百本を切るといえども纔に十廿本を得」るのみとし、その理由を「或いは大木の中空損し、或いは枝節多き難」[65]があったからだとして、木材調達の困難さを訴えている。また、先に『今昔物語集』巻一二・二四の木材を運ぶ牛の話を紹介したが、『東大寺要録』には、「寺僧の相伝に云く」として、牛が木材運搬のため数年間働いた後「斃死」したという話があり、さらに、鑑真が「大唐崇福寺大殿」を修造した際にも同じように牛が木材を運搬したが、それは「金剛の変じて牛と為」[66]ったものであるという話も紹介している。『東大寺縁起』には、東大寺再建にあたり良弁が「千手の法」[67]を使って運河を開削し木材を運んだという話があり、それが『笠置寺縁起』にも収録されている。[68]

木材調達とそれに伴う奇跡を記す事例はこれだけにとどまらない。『聖法輪蔵』の成立より少し時代は下るものの、『太平記』は、一三六一年の大地震で倒壊した四天王寺金堂再建の際に「安芸・周防・紀伊国の杣山より大木を取んずる事」を企図したのだが、「一二年の間には道行きがたし」とあきらめかけていたところ「六、七丈なる冠木三百本」が「難波の浦に流れ寄」せる「希代の奇特」[69]があったと伝えている。『真如堂縁起』（一五二四年）巻上には、夢に「老僧」が現れ「神楽岡の辺に長尺余の檜木千本、一夜の中に生ひたる所あるべし」と述べたところ「日比もみぬ檜木生ひ出でたる事歴然なり」[70]という奇跡があったと記されている。寺院建築に欠かせないヒノキがその場に生えてきたというのだ。近世初期とおぼしき近江の地誌『淡海温故録』「池原延暦寺（＊息障寺）」条には、最澄が「叡山開基ノ前」に「此杣山ニ入材木ヲ求」めた際、その地の「大蛇」が邪魔をしていたので「禁龍ノ法」を修してそれを退け、更に「深密ノ加持ヲ修行」して水路を確保し「伐出シタル材木」を運ばせ「根本中堂ヲ建立」[71]したと

も伝えられている。

これらの記事に宗教的寓意からの誇張を見るのはたやすいが、その背景には、やはり木材調達が困難になっていた現実が透けて見える。聖徳太子の木材調達説話も同様だ。得難いからこそ、それをもたらした奇跡が称えられるわけである。

五　自然景観と樹木伐採

前節では、寺院建築を支える木材調達の難しさを見てきたが、そもそも樹木をめぐる当時の景観をどのように想像すればいいのだろう。むろん、その状態が千差万別であったというのは当然の前提として、平安時代の絵画、例えば「そのいくつかは宇治周辺の特定の地名と明らかに結び」[72]ついていた平等院鳳凰堂扉絵（図1）[73]や、『信貴山縁起絵巻』（図2）[74]を見てみると、鬱蒼とした樹木に覆われる現在の山野とは全く異なる景観が描かれていることがわかる（写真1は現在の信貴山）[75]。むろん、これらは絵画的な技法に従った可能性もあり実景であるとは断定できないが、少なくとも描こうとしている景観は現在の我々が目にするものとかなり異なっている。と

図1

図2

写真1

いうより、第二節でも触れた古写真に写る景観の方が近いようにも思える。[76]

また、中世に数多く製作されていた全国各地の荘園絵図を見ても、葛川絵図や高山寺絵図など一部の例を除くと「絵図全面にわたって樹林が描かれることはまれ」[77]で、はげ山に見えるような表現も少なくない。むろん、荘園絵図の表現自体は意図的な誇張や省略を含みこんでいるとの前提で見る必要があるし、[78]境界を明らかにするために樹木を省略した可能性もあろう。しかし、そうした点を割り引いても、現代のような鬱蒼とした樹木を前にしてあえてそれを描かなかったと考えるには、貧弱な表現が目立つ。

ちなみに、中世の文書を検索していくと、山野の開発とそれに伴う樹木伐採の様子を記した記録が数多く現れる。[79]例えば、永承元年（一〇四六）十二月の「宣旨案」に「河内国誉田山陵の四至内は、狩猟并に樹木を伐ることを停止」[80]（石清水八幡宮文書目録）すべしとあるが、こうした禁令は各地で繰り返し出されており、その被害については「山野を焼くの余炎、堂舎に近くして恐れ多し」[81]（高野山制条、一二三九年）といった焼畑による森林破壊も含まれていた。記録の多くは寺社領に関するものだが、彼らが恐れたのは「材木悉く炭薪の為に伐り尽く」され、そこが「荒廃の地」[82]（近江葛川常住并住人等申状案、一二六九年）となることであった。また、地域によっては「後山の林木はこれを切り尽くす」[83]（近江伊香立荘官百姓等申状案、一二六九年）ような状態であったともされる。これらは、先に見た『聖法輪蔵』「六角堂最初建立事」で、「彼山ニ廿余箇所ニ木屋仮屋（コヤカリヤ）ヲ造リ、上下乱入シテ、我ハ劣ラスシテ材木ヲ取リ侍リケリ」と描写されていたこととも対応する。そして、こうした事例は、「中世成立期には荒野と並ぶ中世的開発対象地」とされ「天然樹林のうっそうと生茂った山地」であった「黒山」が、焼畑や伐木を含む「多面的な山地の利用＝開発」[84]の対象となっていた様相の一端をうかがわせる。

さらに注目されるのは、こういった樹木伐採の禁令について、しばしば「伐木と殺生」をセットで「停止」[85]（左大臣〔近衛家平〕家政所下文、一三一二年）するという文言が挟みこまれている点である。これらは、草木成仏、つまり草木に生命があるかという問題からも議論されているが、[86]樹木伐採を咎める方便として「甚だ以て罪業なり」[87]（六波羅下知状、一二五五年）、「頗る罪業の基なり」[88]（禅慶申状、一三一一年）といった仏教的な価値観を持ち出すことで、開発に制限をかけようとしていたのであろう。

しかし、これも伐採に対して効果があったのかは疑問だ。西明寺（近江国蒲生郡）の訴えによれば、「寺領の山林、昔は霊木茂滋たりと雖も伐採の者なし。近代麓より伐り昇るの間、四至内の霊木、大略これを伐り尽くす」ような状態であったため、「上宮王、殊に禁制の事」ありとして聖徳太子を持ち出し、「霊木を伐採すべからざる」[89]（関白〔鷹司基忠〕家政所下文写、一二七三年）ことを願い出ている。しかし、寺院側の思惑とはうらはらに、近隣住民たちは「自由に動物を狩り、樹木を伐採していた」[90]ようである。

また、勝尾寺では、一二二〇年代の終わり頃から「山下の辺民、国中の悪党等、或は寺領に濫入」[91]（太政官牒、一二三〇年）し、「殺生と伐木」[92]（太政官牒、一二九四年）を繰り返していたことが、文

書や縁起を通して伝えられている。[93] 勝尾寺縁起は『聖法輪蔵』別伝の類話をのせる慶應義塾図書館蔵本や勧修寺蔵本に引用されることでも注目されており、[94] 一一八四年に焼失した勝尾寺再建に際しては、一一八六年に「天王寺より檜皮大工十一人」[95]（勝尾寺再建記録）も参加したとあるなど、四天王寺との関係もうかがえる。ただ、これが聖徳太子の木材調達説話と直接関わるかは不明で、特定の場所というよりは、同じような樹木伐採による軋轢が各地で発生しており、それがこの説話の背景にあったと考える方が自然であろう。

むろん、このように伐採が問題にされているということは、裏を返せば樹木がある程度生えていたということでもある。繰り返される禁令は森林を保護する運動でもあり、里山として守られていた空間があったこともよく知られている。[96] 謡曲『采女』では、シテの女性が春日大社の縁起を僧に語る場面があり、背後の御蓋山は「もとは端山の蔭浅く、木蔭一つもなかりし」とするが、藤原氏の「氏人寄りて植ゑし木」の成長で「ほどなくかやうに深山」[97]になったという。[98] 中世に数多く制作された『春日曼荼羅』を見ると、神社の後方には樹木がびっしり描きこまれているが、これは荘園絵図で「山体を樹木で覆う表現が社寺結界の聖域を指示する際の表現」[99]である点とも呼応する。[100] 本稿では樹木伐採に焦点をあててきたが、実景か否かを言い出すときりがなく、場所によっても差異は大きかったはずである。

六　おわりに

我々は、現代の自然景観について、まさに自から然りという意味で以前から同じものと考えがちであり、山は樹木で覆われているものだという「既成概念をくつがえす」[101]のは非常に難しい。いわゆる、かつては「眼を上げれば、四季の変化を体現している森林や森林でおおわれた山が真近にせまっていた」[102]というイメージである。そして、その背後に「日本文化の起源や形成を考えるに当って、一つの有力な学説」[103]となった照葉樹林文化論の影響を見るのはたやすい。照葉樹とは「カシだとかクスノキだとか、ツバキ、モチノキ、サザンカなど、われわれのよく知っている」[104]常緑広葉樹をさすが、「日本は照葉樹林の本場」[105]であるとするなら、そこからイメージされる景観は、濃い緑に包まれていることであろう。

しかし、古典における自然描写の量的・質的な豊富さを考えると、このイメージの呪縛にはよほど注意しておく必要がある。過去の日本の景観を具体的な姿に落とし込む際の足かせともなりうるからだ。

本稿を終えるにあたり、このイメージの呪縛にまつわる問題と関連して言及しておきたいのが、映画『もののけ姫』である。「むかし、この国は深い森におおわれ、そこには太古からの神々がすんでいた」というテロップとともに、緑に覆われた山々の俯瞰から始まるこの映画が、照葉樹林文化論に刺激を受けて生まれことはよく知られている。[106] 日本の中世を舞台として、人間が自然を開

発することの是非をテーマの一つに据えた作品である。

監督の宮崎駿は、この映画製作が始まった頃のインタビューで、人間による自然破壊が始まったのは産業革命以後ではなく「農耕を発明した途端に、はげしく自然を収奪しはじめた」[107]と述べ、クライブ・ポンティング『緑の世界史』で取り上げられたイースター島の話を紹介している。そこでは、木を切り尽くしてしまったために船が作れなくなり、巨大な石像とともに「他の世界からほとんど完全に隔絶」[108]された状態に追い込まれた島民の姿が描き出されている。これは「必須の資源を完全に枯渇させるまで消費し続け」[109]ることへの警鐘であり、『もののけ姫』が訴えるのも、このような人間による自然破壊であるのは明らかだ（イースター島の事例がどこまで事実かについては議論もあるが、今は措く）[110]。

しかし、実際の映像は見る者を困惑させる。映画に登場するエボシと呼ばれる女性の率いる集落は、巨大な木を連ねる防護柵に囲まれた要塞として描かれ、その内部では製鉄のため燃えさかるタタラが登場する。そして、その要塞の近くには、照葉樹林と思われる広大な樹海が広がっている。だが、要塞のための巨木はどこから伐り出し、タタラは何によって燃えさかっているのか。中世後半になってタタラ製鉄が盛んになった中国地方の森林では、近代に入るまで「強度の利用圧にさらされて荒廃」が進み、窯業が盛んだった地域でも山林は著しく劣化していた[111]。イースター島の逸話を踏まえるならば、その周辺は鬱蒼とした樹海ではなく、『信貴山縁起絵巻』が描くような殺伐とした山野ではなかったのか（映像では樹木のない高地や草原も登場するし、物語展開上の都合もあるので、無視していたということでもないのであろうが）。このことは、過去の自然景観を描き出すことの難しさを改めて教えてくれる。

注（1）『四天王寺縁起』の成立は、榊原史子『四天王寺縁起の研究――聖徳太子の縁起とその周辺』（勉誠出版、二〇一三年）が詳細に考証する。

（2）同書は『正法輪蔵』とも表記され、阿部隆一「室町以前成立聖徳太子伝記類書誌」（聖徳太子研究会編『聖徳太子論集』平楽寺書店、一九七一年）が基礎的な伝本整理を行っており、阿部泰郎「中世聖徳太子伝『正法輪蔵』別伝における四天王寺縁起――勧修寺大経蔵本『正法輪蔵』解題・翻刻」（『勧修寺論輯』三・四、二〇〇六年）が先行研究なども含め詳しい紹介を行っている。

（3）橋本正俊「中世六角堂縁起異説」（『国語国文』七五・五、二〇〇六年）、同「六角堂縁起の展開と太子伝」（『巡礼記研究』三、二〇〇六年）。

（4）本稿（特に第三節）の骨子となる内容は「聖徳太子伝の「木」に関する説話」（シンポジウム『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』ハノイ大学、二〇一八年）として口頭発表したものである。

（5）西岡常一『木に学べ――法隆寺・薬師寺の美』（小学館、一九八八年、一二～三頁）。

（6）以上、小原二郎『日本人と木の文化』（朝日新聞社、一九八四年、一九四頁）。

（7）原田洋・井上智『植生景観史入門』（東海大学出版会、二〇一二年、二六頁）。

（8）原田・井上同前掲注（7）五頁。

（9）以上、千葉徳爾『増補改訂はげ山の研究』（そしえて、一九九一年、四一頁）。

（10）以上、藤田佳久「林野利用の変化」（西川治監修『アトラス日本

列島の環境変化』朝倉書店、一九九五年、七五、七七頁）。

(11) 太田猛彦『森林飽和――国土の変貌を考える』（ＮＨＫ出版、二〇一二年、五頁）。

(12) 以上、田中淳夫『森と日本人の１５００年』（平凡社、二〇一四年、三五頁）。また、『日本人はどのように森をつくってきたのか』（築地書館、一九九八年）の著者コンラッド・タットマンは、一九五四年に来日した際の印象を「ほとんど樹木のない場所や低木地が山腹に広がり、それが隣接する造林地と鋭いコントラストをなしていた」（同一四頁）と記している。

(13) 富山和子『水と緑と土――伝統を捨てた社会の行方』（中央公論社、一九七四年、一二七頁）。

(14) 小林茂・宗健郎「環境史から見た日本の森林――森林言説を検証する」（池谷和信編『地球環境史からの問い――ヒトと自然の共生とは何か』（岩波書店、二〇〇九年、一七〇頁）。

(15) 田中淳夫『獣害列島――増えすぎた日本の野生動物たち』（イースト・プレス、二〇二〇年）。

(16) 太田同前掲注(11)五～六頁。

(17) 『国民性十論』（富山房、一九〇八年、九一頁）。

(18) 小峯和明「南方熊楠と熊野世界」（『環境という視座――日本文学とエコクリティシズム（アジア遊学１４３）』勉誠出版、二〇一一年）は、熊野三山の荒廃について述べる。

(19) オギュスタン・ベルク・篠田勝英訳『日本の風景・西洋の景観そして造形の時代』（講談社、一九九〇年、一一頁）。

(20) 以上、太田同前掲注(11)五〇頁。

(21) 塚田松雄『花粉は語る』（岩波書店、一九七四年、九二頁）。

(22) 川村晃生「和歌から〈焼畑〉を考える」（『藝文研究』九一・一、二〇〇六年）。

(23) 辻誠一郎「植物相からみた三内丸山遺跡」（『青森県埋蔵文化財調査報告書第２０５集三内丸山遺跡Ⅵ』一九九六年）。

(24) 岡田康博「巨大な遺構」（『遙かなる縄文の声』日本放送出版協会、二〇〇〇年）。

(25) 例えば、登呂遺跡では大量の板が使われた遺構が発見されている（森豊『『登呂』の記録』講談社、一九六九年、一六六頁）。

(26) 西田正規「須恵器生産の燃料について」（『大阪府文化財調査報告書第三〇輯　陶邑Ⅲ本文編』大阪府教育委員会、一九七八年）、日下雅義他「泉北丘陵および周辺部の地理的環境と遺跡の立地」（『大阪府文化財調査報告書第三三輯　陶邑Ⅴ』大阪府教育委員会、一九八〇年）。

(27) 柴田常恵『ヒノキ分布考』（帝国林野局、一九三七年、四四頁）。

(28) 以上、鳥羽正雄『日本林業史』（雄山閣、一九四一年、四一頁）。

(29) 柴田同前掲注(27)六〇～一頁、小原同前掲注(6)一九六～八頁、丸山岩三「奈良時代の奈良盆地とその周辺諸国の森林状態の変化（Ⅸ）」（『水利科学』三八、一九九四年）など。

(30) 川村晃生『日本文学から「自然」を読む』（勉誠出版、二〇〇四年、一一〇頁）。また同「「松原」の成立」（和歌文学会論集編集委員会編『歌われた風景』笠間書院、二〇〇〇年）でも環境と和歌の松の問題を論じる。

(31) 只木良也『新版　森と人間の文化史』（日本放送出版協会、二〇一〇年、六七～九頁）。

(32) 以上、新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館、一九八四年、二六六、三五四頁）。

(33) 矢野義男「所謂大同元年砂防起源説について」（『新砂防』一二〇、一九八一年）、丸山岩三「奈良時代の奈良盆地とその周辺諸国の森林状態の変化（Ⅶ）」（『水利科学』三七・五、一九九三年）、小原同前掲注(6)一九〇頁など。また、和歌からの分析には、川村晃生「飛鳥川の淵瀬」（『藝文研究』七七、一九九九年）がある。

(34) 水野章二「原「里山」の光景――中世の後山」（『中世の人と自然の関係史』吉川弘文館、二〇〇九年）、同「和歌に詠まれた平安末期の里山空間」（『里山の成立――中世の環境と資源』岩波書店、二〇一五年）。

(35) 新編日本古典文学全集『万葉集（四）』（小学館、一九九六年、二二二頁）。
(36) 市川秀和「能登半島の風土と植生――風景論への一つのアプローチ」（『福井大学地域環境研究教育センター研究紀要』五、一九九八年）。
(37) 新編日本古典文学全集『新古今和歌集』（小学館、一九九五年、六九頁）。
(38) 鈴木健一『天皇と和歌――国見と儀礼の一五〇〇年』（講談社、二〇一七年、四九頁）。
(39) 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、一九九七年、三四七頁）。
(40) 以上、有岡利幸『ものと人間の文化史一一八・一――里山Ⅰ』（法政大学出版局、二〇〇四年、二〇頁）。
(41) 新編日本古典文学全集『万葉集（一）』（小学館、一九九四年、二四頁）。
(42) 鈴木同前掲注(38)三八頁。
(43) 同前掲注(39)二八七頁。
(44) 新編日本古典文学全集『日本書紀（三）』（小学館、一九九八年、三七頁）。
(45) 橋本同前掲注(3)。類似の記事は『太子伝古今目録抄』『上宮太子拾遺記』『聖誉抄』などにも見える。
(46) 藤田経世編『校刊美術史料寺院篇上巻』（中央公論美術出版、一九七二年、一二二頁）。以下、引用書で漢文体のもの（部分を含む）は訓読で示し漢字は新字体とした。
(47) 平松令三編『真宗史料集成第四巻専修寺・諸派』（同朋舎、一九八二年、五四五頁）。漢文部分は訓読しているため文字の相対的な大きさなど一部表記を改めた（以下同）。
(48) 以下、「六角堂最初建立事」の引用は平松同前掲注(47)五四九～五一頁。
(49) 水野章二「中世の後山」（同前掲注(34)二〇一五年）。
(50) 『今昔物語集』などに見える菌類の記事から「ほぼ一三世紀ころから京都盆地をめぐる丘陵地が原生林相からアカマツ林へ変貌（千葉同前掲注(9)一〇四頁）」したとの見解もある。
(51) 牧野和夫「慶應義塾図書館蔵『聖徳太子伝正法輪』翻印並びに解説」（『東横国文学』一六、一九八四年、九九頁）。
(52) 比叡山との関連については橋本同前掲注(3)「六角堂縁起の展開と太子伝」参照。
(53) 橋本同前掲注(3)「六角堂縁起の展開と太子伝」が各絵伝の図柄の考察を行う。
(54) 一三二五年書写。吉原浩人「観音の応現としての聖徳太子・親鸞――『聖徳太子内因曼陀羅』」（『国文学解釈と鑑賞』五四・一〇、一九八九年）がその概要を示す。
(55) 平松同前掲注(47)四二七頁。
(56) 北條勝貴「山と森の文化史――山林にて、虎と遭う」（ハルオ・シラネ編『東アジア文学講座4　東アジアの自然観――東アジアの環境と風俗』文学通信、二〇二一年）。
(57) 北條勝貴「山背嵯峨野の基層信仰と広隆寺仏教の発生――古代的心性における治水と樹木伐採」（『日本宗教文化史研究』三・一、一九九九年）、同「伐採抵抗伝承・伐採儀礼・神殺し――開発の正当化／相対化」（増尾伸一郎・工藤健一・北条勝貴編『環境と心性の文化史　下』勉誠出版、二〇〇三年）。
(58) 小峯和明「『今昔物語集』〈樹〉の風景」（国東文麿編『中世説話とその周辺』明治書院、一九八七年、七四頁）、瀬田勝哉「巨樹を伐る――『今昔物語集』」（『木の語る中世』朝日新聞社、二〇〇〇年、一〇～三頁）。
(59) 日本古典文学大系『三教指帰・性霊集』（岩波書店、一九六五年、三九三～四頁）。
(60) 新編日本古典文学全集『今昔物語集（一）』（小学館、一九九九年、一一六頁）。
(61) 新編日本古典文学全集『日本書紀（一）』（小学館、一九九四年、一〇〇～一頁）。柴田同前掲注(27)四三頁など、諸書で繰り返し言

及される。

(62) 新編日本古典文学全集『風土記』（小学館、一九九七年、一九九〜二〇〇頁）。『七大寺巡礼私記』大安寺条、『醍醐寺本諸寺縁起集』高野寺条、『護国寺本諸寺縁起集』多武峰条などにも木材調達記事がある。

(63) コンラッド・タットマン同前掲注(12)第一章の表題による。

(64) 丸山岩三「奈良時代の奈良盆地とその周辺諸国の森林状態の変化(X)」（『水利科学』三八―六、一九九五年）、五味文彦「源平交代」「周防・京・鎌倉」（『大仏再建――中世民衆の熱狂』講談社、一九九五年）など。

(65) 以上、『大日本仏教全書（一二一）』（仏書刊行会、一九一五年、五一頁）。

(66) 以上、筒井英俊校訂『東大寺要録』（国書刊行会、一九七一年、四三〜四頁）。

(67) 『続群書類従』（第二七輯ノ上、続群書類従完成会、一九二六年、五一九頁）。本文注記では文明一四（一四八二年）成立。

(68) 田中尚子「笠置寺縁起の位相――護国寺本『諸寺縁起集』所収「笠置寺縁起」を中心に」（『国文学研究』一三一、二〇〇〇年）。

(69) 新編日本古典文学全集『太平記（四）』（小学館、一九九八年、二二二〜三頁）。

(70) 小松茂美編『続々絵巻大成　伝記・縁起篇5』（中央公論社、一九九四年、一七九頁）。

(71) 滋賀県地方史研究家連絡会編『近江史料シリーズ（2）淡海温故録』（滋賀県地方史研究家連絡会、一九七六年、一四頁）。石川正知「淡海温故録について」（同）は、『淡海温故録』の成立を貞享年間（一六八四〜八八）頃と推定する。『叡山大師伝』や『続日本後紀』には、最澄が豊前国香春で寺を建て読経をしたところはげ山に草木が生えたという逸話がある。佐伯有清『伝教大師伝の研究』（吉川弘文館、一九九二年、四二〇〜一頁）、北條勝貴「初期神仏習合と自然環境――〈神身離脱〉形式の中・日比較から」（水島司編『環境に挑む歴史学』勉誠出版、二〇一六年、一四一〜三頁）参照。

(72) 秋山光和編『平等院大観第三巻絵画』（岩波書店、一九九二年、一二頁）。

(73) 秋山同前掲注(72)図版一六頁「復元現扉上品中生図」より作図。

(74) 『「国宝」誕生百十周年記念◆特別公開　国宝信貴山縁起絵巻』（北國新聞社・石川県美術館・信貴山総本山朝護孫子寺、二〇〇六年、二〇頁）より作図。

(75) 写真1は筆者撮影。

(76) 原田・井上同前掲注(7)四〜三〇頁に明治大正時代の様々な古写真が紹介されている。

(77) 下坂守・長谷川孝治・吉田敏弘「葛川絵図――絵図研究法の例解のために」（葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー（上）』（地人書房、一九八八年、八八頁）。

(78) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』（平凡社、二〇〇二年、二七〇〜一頁）。

(79) 水野章二「荘園制と里山空間」（同前掲注(34)二〇一五年）など。

(80) 以上、竹内理三編『鎌倉遺文（六）』（東京堂出版、一九七四年、四三二頁）。

(81) 竹内理三編『鎌倉遺文（八）』（東京堂出版、一九七五年、四九頁）。

(82) 竹内理三編『鎌倉遺文（一四）』（東京堂出版、一九七八年、八六頁）。

(83) 竹内同前掲注(82)七九頁。

(84) 以上、黒田日出男「「荒野」と「黒山」――中世の開発と自然」（『境界の中世象徴の中世』東京大学出版会、一九八六年、二〇〜五頁）。

(85) 以上、竹内理三編『鎌倉遺文（三二）』（東京堂出版、一九八七年、二二八頁）。

(86) Fabio Rambelli「Against Tree Cutting: Environmentalism, Religion, and Ideology」（『Buddhist Materiality: A Cultural History of Objects in Japanese Buddhism』Stanford University Press、二〇〇七年）。

(87) 竹内理三編『鎌倉遺文（一一）』（東京堂出版、一九八六年、八二頁）。
(88) 竹内同前掲注(85)一八頁。
(89) 以上、竹内理三編『鎌倉遺文（一五）』（東京堂出版、一九七八年、七七～八頁）。
(90) Fabio Rambelli 同前掲注(86)一五九頁。
(91) 竹内同前掲注(80)一九二頁。
(92) 竹内理三編『鎌倉遺文（二四）』（東京堂出版、一九八三年、一四六頁）。
(93) 詳細は「寛喜の山境相論」（箕面市史編集委員会編『箕面市史（一）』箕面市役所、一九六四年）参照。
(94) 阿部泰郎「中世聖徳太子伝『正法輪蔵』の構造――秘事口伝をめぐりて」（林雅彦編『絵解き――研究と資料』三弥井書店、一九八九年）。
(95) 箕面市史編集委員会編『箕面市史史料編（一）』（箕面市役所、一九六八年、二五頁）。
(96) 水野章二「荘園制と里山空間」（同前掲注(34)二〇一五年）など。
(97) 以上、新編日本古典文学全集『謡曲集』（小学館、一九九七年、二六二頁）。
(98) 松村和歌子「春日曼荼羅に見える聖性の源流」（根津美術館学芸部編『春日の風景――麗しき聖地のイメージ』根津美術館、二〇一一年）。
(99) 松尾容孝「高山寺絵図のランガージュ」（葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー（下）』（地人書房、一九八九年、一〇頁）。
(100) なお『春日権現記絵』では、最後に神木が枯れる場面も登場する。
(101) 原田・井上同前掲注(7)三頁。
(102) 樋口忠彦『日本の景観』（筑摩書房、一九九三年、三二頁。初版：春秋社、一九八一年）。同書には「弥生時代に入って大規模な森林の伐採が行なわれ（三〇頁）」たとの記述もあるが、山と森林の結びついたイメージは強かったようである。
(103) 佐々木高明『日本文化の基層を探る――ナラ林文化と照葉樹林文化』（日本放送出版協会、一九九三年、二五頁）。
(104) 上山春平編『照葉樹林文化』（中央公論社、一九六九年、六六頁）。
(105) 上山同前掲注(104)七三頁。
(106) 叶精二「照葉樹林文化」（『別冊 COMIC BOX「もののけ姫」を読み解く』ふゅーじょんぷろだくと、一九九七年）。
(107) 『COMIC BOX』（九八、ふゅーじょんぷろだくと、一九九五年、一一頁）。
(108) クライブ・ポンティング著・石弘之、京都大学環境史研究会訳『緑の世界史（上）』（朝日新聞社、一九九四年、一七頁）。
(109) クライブ・ポンティング同前掲注(108)一八頁。
(110) ルトガー・ブレグマン・野中香方子訳「イースター島の謎」（『Humankaind 希望の歴史（上）　人類が善き未来をつくるための18章』文藝春秋、二〇二一年）。
(111) 太田同前掲注(11)八八～九四頁。